
幽霊

ポテトバサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊

【Nコード】

N7563N

【作者名】

ポテトバサー

【あらすじ】

短編小説三作目。

短いので気軽にどうぞ。

感想を下さった方、ありがとうございます！！
やる気がかなり向上いたしました！！

(前書き)

短編小説の三作目です。

動物学者と製菓学者のお話。

短いので気軽に読んでみてください♪

ツムツムは動物学者だった。彼はこれまでにない新しい動物を発見した。

その動物を調査し学会へ発表するつもりだった。

「しかし困った。あれだけ獰猛だとかつに近づけやしない。どうしたものか……」

悩んだ挙句、ツムツムは仲のいい科学者に電話をかけた。

「ああもしもし？ ツムツムだ。イユイユ久しぶりだな。研究ははかどっているかい？」

「ああかなりはかどっているよ。実は新薬を開発してね……」

「ほお、新薬！ どんなものなんだい？」

「他言はよしてくれよ？ とてつもない新薬なんだからな」

「ははっ、心配するな！ 僕と君の仲だろ？」

「わかったよ。それでね、僕が開発した新薬はだね、人間の意識だけを体内から取り出せる薬なんだ」

「んーっと、つまり幽体離脱みたいなことかい？」

「さすが！ その通りだよ！」

「とか何とか言って、ただの毒薬なんかじゃないのかい？」

「ちよっ、違うって！　ちゃんとした薬だよ！　自分の体で効果のほどもしつかりと確かめたしたね」

「ん？　幽体離脱しているときは自分自身はどうなるんだ？」

「ん？　自由に行き来できるよ。壁などの物体もすり抜けられるし、人の目にもうつらないし。だが、プライバシー―保護や悪用されないように幽霊状態時にすり抜けられないバリアなども製作中だよ」

ツムツムはあることを思いついた。

「なあ……　その薬を少しだけ貸してくれないか？」

「えっ？　ダメダメ！！　いくら君とはいえそれはダメだよ！！　君のことだ、行き詰った研究の羽のばしかなんかに使う気だろ？」

「あっいや……　今回は違うんだよ！　僕も新しい発見をしてね」

「新しい発見？　うむ詳しく聞かせてくれ」

「僕が発見したのは新しい動物だね。ネコ科の動物なのだが、とても獰猛で近づけないんだ。研究しようにも出来ないんだよ」

「なるほど、それで僕の新薬をどこかに売りつけて、そのお金で装甲車でも買おうと？」

「そうそう……　って違うよ！！　なんで遠回りするんだよ。そうじゃなくて幽体離脱をして近づこうと……」

「なるほど、そういうことなら構わないよ。僕のほうももう少し検証したかったからね。でも少し時間をくれないか？　まだ新薬の効能時間が短いんだ。効能時間を延ばすように改良してみるから」

それから、二カ月後、使い勝手が数段増した薬が完成した。早速ツムツム博士はジャングルへと向かった。

「それにしても大丈夫かい？　君までついてきて？　新種の動物はかなり危険なんだぞ？」

「クエスチョンマークを付けすぎだよ。心配いらないさ、なんとって僕の新薬があるからね。何度もテストをしてようやく出来たんだ。しかし、万が一って事がある。何か問題が起きたときに開発者の僕がいたほうが良いと思ってさ」

助手12人、ガイド4人、博士2人からなる計18人はジャングルの奥地に設置された小屋に到着した。

「よし助手の皆、データ採取の準備に取り掛かってくれ」

助手達は大急ぎで準備に取り掛かった。様々な機械が設置され二つの簡易ベッドも用意された。

「さあ、この薬を飲んで横になってくれ」

イユイユ博士はピンク色の液体の入ったビンを取り出した。

「す、すごい色だな……」

「ああ、これにはモモイロト液が含まれているからね」

イユイユは何も考えずにその液体を飲み干した。ツムツムは色が色だけにその液体を不安と一緒に飲み干した。

「ん？ 意外とイケるなあ。甘酸っぱくて爽やかな味がする」

「ああ、これにはアノヒノ系ハツコイ酸も含まれているからね」

「…………… いろいろな成分があるんだな……………」

二人そろって簡易ベッドに横になり互いの研究の話をしていると、いつの間にか眠りに落ちていた。

「んゝ、体がホワホワするぞ？」

「見てごらんよ、下を」

イユイユの声にしたがってツムツムは足元を見てみた。

「うわっ！ あ、あれは俺だ！ のおっ！ イユイユもいる！」

「ははっ、成功したんだよ幽体離脱に！」

「いやー、イユイユの研究はすごいな……………」

「いやいや………… まあでもすごいかな………… だがツムツム、君の研究も今日ですごいことになるんじゃないか？」

「え？ ……ああそうだった、では早速ジャングルに向かおう」

そう言う和小屋の壁をすり抜け、ジャングルの更に奥へと向かった。

「うゝん。かれこれ二時間、全く見つからないな……」

「いやー申し訳ないなあ。こんなはずじゃ……」

「何いつてるんだツムツム。発見とは時間がかかるものだよ。水溶性ラレルを発見したゼルゼル博士なんかは親子三代での発見だったじゃないか！」

「そうだな、弱音なんて吐いてられないな！」

「そうだ、その意気だ！」

二人の間に以前よりも強く熱い友情が芽生えてから更に二時間が経過したそのとき、遂に追いかけていた動物を発見した。

「あっ！　いたぞイユイユ！！」

大きな岩のかげを指差しながらツムツムは叫んだ。

「あれが……」

「そうだ僕の研究しているのがあの動物だよ」

「にしてもすごいな！　キリンのようでもあるし象のようでもある。だが胴体はどう見ても亀そのものだ」

「ああ、あれでネコ科だからね、不思議な生物だよ」

二人は幽霊状態の特性をフル活用してその動物を調べた。

「今日はこの辺りにしようか」

「ああそうだな、そろそろ帰るか」

「ところで名前は決めたのかい？」

「ああ、最初は自分の名前をつけようかと思っていたんだが「イユツムカメモドキ」とすることにしたよ」

「えっ？」

「僕と君の友情の証と思ってね」

「奇遇だな！　僕もあの新薬の名前を「ツムイユ離脱剤」にしようかと思っていたんだ」

「オイオイ、その名前じゃ何から離脱するかわからないじゃないか！」

「それもそうだな！　ははっ」

小屋までの道のりを二人は楽しく過ごした。

「ふう〜ようやく小屋が見えてきた」

「ああ、幽霊だから肉体的な疲れは無いが精神的な疲れはやっぱりあるね」

そんなことを言っていた二人はあるものを見つけて驚いた。

「あっあれはイユツムカメモドキじゃないか？」

「本当だ。まさかもう一つの群れがいたとは……」

「しかも僕たちが出発した方向と逆とは……」

「まっ、明日の調査が楽になる」

「そうだな」

二人は小屋の壁をすり抜け中に入った。

「あっ！」

「なんということだ……」

二人は唾然とした。助手、ガイドたちが全員血だらけになって倒れていた。

「こ、これは動物の牙のあとだ……」

「ということは今さっきみたイユツムカメモドキの仕業か？」

二人は意気消沈したが、すぐに違う感情が湧いてきた。

「あああああああ！……！！」

「どうしたツムツム!!」

「僕たちも殺されてる・・・」

「え!?!」

簡易ベッドの上には見るも無残な二人が横たわっていた。

「どうしてくれるんだ!!　これじゃ元に戻れないじゃないか!!」

「仕方ないだろう!!　僕だってこんなことになるとは思わなかったんだから!!」

「仕方ないだと!!　ふざけるな!!」

「何だと!!　もう一度言ってみろ!!」

二人は大喧嘩を始めてしまった。

「何がイユツムカメモドキだ!!　博士モドキめ!!」

「うるさい!!　ツムイユ離脱剤だあ!?!　僕は君と離脱したいよ!!」

ケンカというものは勝っても負けても疲れるものである。翌日には体中が痛い。二人には関係ないが。

「もういい、君など知らないよ!」

「それはこっちの台詞だ。君なんかと二度と会うもんか!」

二人は小屋の壁をすり抜け別々の方向に飛び去っていった。まさに死別である。

そして互いに分かれた後すぐにこう言った。

「イユイユめ……」

「ツムツムめ……」

「化けて出てやる!!」

「化けて出てやる!!」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7563n/>

幽霊

2011年10月7日15時15分発行